

ブロカット語の音韻体系： ブータン王国ブムタン県ドゥル村言語調査初歩報告

西 田 文 信

摘要： Brokkat 語, 又稱 Brokpagikha, B'umthang D'ürg'i Bjobikha, 為不丹王國的一個語言, 從字由意義來首, Brok 是指游牧民族, 分布在同國 Bumthang 縣 Chhkor 溪谷之語言。筆者 2013 年以及 2014 年期間向講 Brokkat 語的人搜集有關資料, 並根據得資料完成此項研究。該論文首先論述 Brokkat 語的語言狀況, 作者同時對 Brokkat 語言的語音系統和它的語音歷史演變進行討論。

0. はじめに

筆者は 2013 年 2 月, 3 月, 12 月及び 2014 年 1 月にかけて断続的に, これまでに言語学的記録が全く存在しないブロカット語の音韻・形態・統語の記述を目的とした語彙及び文法調査をブータン王国ブムタン県にて行った。本稿はその調査結果の報告であり, 音声, 音韻の記述, 分析を目的とするものである。

1. ブロカット語の背景

1.1. ブータン諸語について

チベット = ビルマ言語学の泰斗 George van Driem (ベルン大学教授) による van Driem (1991) の出版以前はブータン王国の諸言語についてのまとまった記述は皆無であった。現在ブータン王国では確認できる限り 18 言語が分布している。その後刊行された van Driem (1998, 2001) によればブータン王国の諸言語は下記のように分類される¹⁾：

Central Bodish: Cho-ca-nga-ca-kha, Lakha, Brokpa, Tibetan, **Brokkat**

1) この他に, ブータン王国南部には Kurux 語 (インド北東部ビハール州ラーンチー, 中央部マディヤ・プラデーシュ州ラージガル県, 東部西ベンガル州ジャルパーイーグリー県に分布するドラヴィダ系言語) が話されているが, ブータン王国の政府機関として言語研究・政策を担当しているゾンカ語開発委員会 (Dzongkha Development Commission) の発表資料には当該言語のデータが存在しない。これは, 同委員会が 1907 年の王政移行後に移民してきた者の言語に関しては独立した言語と見做さないという原則に基づいているためである。また, 同国では教育言語として英語が初等教育のクラス I に入る前に 1 年間の予備教育 (pre-primary) のクラスから教授され, またリングア・フランカとして広く使用されている。各言語及び同国の社会言語学的な状況の概観は西田 (2008) を参照のこと。

East Bodish²⁾: Kheng, Bumthang, Dzala, Kurtöp, Mangdebi-kha, Chali, Black Mountain, Dakpa
Other Languages: Tshangla, Lhokpu, Gongduk, Lepcha, Nepali

ブータン諸語の分布は以下の如くである：



図 1: ブータン王国の言語分布
 【典拠：高橋洋氏提供の資料による³⁾】

ブータン王国の言語別話者人口に関するセンサスを纏めると以下ようになる：

言語名	van Driem (1991)	PHCB (2005)	GNH (2008)
Dzongkha	160,000	146,681	156,206
Cho-ca-nga-ca-kha	20,000	12,065	48,894
Lakha	8,000	-	-
Brokapa	5,000	-	-
Tibetan	1,000	1,270	1,270
Brokkat	300	-	-
Kheng	40,000	34,924	60,958
Bumthang	30,000	12,065	26,669
Dzala	15,000	4,445	15,875
Kurtöp	10,000	18,414	12,065
Mangdebi-kha	10,000	5,080	4,445

2) この言語群の下位分類に関しては西田 (2012) にてその初歩的な試みを施した。

3) 資料を忝くした高橋洋氏には記して感謝申し上げる。

Chali	1,000	1,905	635
Black Mountain	1,000	-	-
Dakpa	1,000	635	1,270
Tshangla	138,000	173,350	236,848
Gongduk	2,000	-	-
Lepcha	2,000	-	-
Lhokpu	-	2,540	8,890
Nepali	156,000	132,711	54,608
Kurux	-	1,905	635

表 1: ブータン諸語の話者人口

【典拠：van Driem (1991), PHCB (2005): *Results of Population & Housing Census of Bhutan 2005*, Thimphu: Royal Government of Bhutan, GNH(2008): Sangay Chopel. 2008. *Gross National Happiness 2008 survey results - Cultural Diversity and Resilience*. に基づき作成】

ブータン王国には、未だ研究が十分に進んでいない民族言語が多数存在する。ブータン諸語の大部分はシナ=チベット語族・チベット=ビルマ語派に属する。ブータン王国中部で話されている所謂ブムタン・グループの諸言語や東部で話されている諸言語はそれぞれ音韻上及び形態上の共通特徴を有しているが、シナ=チベット語族の最古層を反映していると考えられ、民族移動の観点からしてもブータン王国の諸言語の学術的価値は極めて高い。しかるに、纏まった記録や記述のある言語はむしろ例外である。十分な情報を書いた（あるいは皆無の）言語の殆どがいまや急速に消滅に向かっており、生きた言語を有効に研究できる残余期間は限られている。遅きに失することなく、一刻の猶予なく調査・研究の取り組みを始める必要と責務が言語学者にはあると強く考える⁴⁾。

ブータン諸語は数詞に 20 進法 (vigesimal system) を用いることが特徴的である。プロカット語の序数詞と基数詞は以下の如くである：

0	le ^H kor ^L	21	ke ^H tci ^H dan ^L tci ^H
1	tci ^H	30	ke ^H tci ^H dan ^L tci ^H t ^h am ^H ba ^H
2	ni: ^H	40	ke ^H ni ^H
3	sum ^H	50	ke ^H ni ^H dan ^L tci ^H t ^h am ^H ba ^H
4	pci ^R	60	ke ^H sum ^H
5	ŋa ^H	70	ke ^H sum ^H dan ^L tci ^H t ^h am ^H ba ^H
6	tu: ^R	80	ke ^H ci ^L
7	tɣ ^L	90	ke ^H ci ^L dan ^L tci ^H t ^h am ^H ba ^H
8	gɛ: ^L	100	ke ^H ŋa ^H
9	ku ^L	200	ke ^H tci ^H t ^h am ^H ba ^H
10	tci ^H t ^h am ^H ba ^H	300	ke ^H tci ^H ŋa ^L
11	tci: ^H tci: ^H	400	ni ^L tci ^H
12	tci: ^H ni: ^H	500	ni ^L tci ^H dan ^L tsa ^H ŋa ^H

4) ブータン諸語の記述・歴史言語学的研究の現状に関しては西田 (2013a) を参照のこと。

13	tɕuk ^H sum ^H	600	niɕ ^L tɕik ^H dan ^L ke ^H ŋa ^H
14	tɕu: ^H pɕi ^H	700	niɕ ^L tɕik ^H dan ^L ke ^H tɕɕ ^H ŋa ^H
15	tɕɛ: ^H ŋa ^H	800	niɕ ^L ni: ^H
16	tɕø: ^H tu: ^H	900	niɕ ^L ni: ^H ke ^H ŋa ^H
17	tɕuk ^H tɕi ^H	1,000	tɕik ^H ton ^H tɕik ^H
18	tɕap ^H gɕɛ ^H	2,000	ton ^H tɕa ^H ni ^H
19	tɕur ^H ku ^H	10,000	ton ^H tɕa ^H tɕu ^H tɕam ^H ba ^H
20	ni ^R ɕu ^H / ke ^H tɕi ^H	100,000	bum ^H tɕi ^H

表 2: ブロカット語の基数詞

first	tan ^R bo ^H	sixth	tuk ^R pa ^H
second	ni: ^H ba ^H	seventh	tɕi ^L ba ^H
third	sum ^H ba ^H	eighth	gɕɛ ^L pa ^H
fourth	pɕi ^R ba ^H	ninth	ku ^L ba ^H
fifth	ŋa ^H ba ^H	tenth	tɕu ^H ba ^H

表 3: ブロカット語の序数詞

1.2. ブロカット語の分布地域・話者数

ブロカット (Brokkat) 語はブータン王国 Bumtan (Bumtahng) 県 チョコル (Chhokor) 溪谷のドゥル (Dhur/Dur) 村 (N 27° 36, 807', N 90° 39, 961', 高度: 2,845m) に居住する遊牧民の言語である。ドゥル村は Dhur Maed, Dhur Toed, Lusibee, Tongmenba という 4 つの地域に分かれているが、ブロカット語はそのうち Dhur Toed で話されている言語である。この言語の話者は季節により移牧 (tramshumance) するため、筆者が 2013 年 12 月から 2014 年 1 月に言語調査を行ったのは標高 3,450m の地点である。

筆者の調査で確認できた該言語の母語話者数は約 80 人であるが、形態統語面でブータン王国の公用語であるゾンカ語や地域のリングアフランカである Bumtan 語の干渉の無く流暢に操れる話者は 50 人弱である。Krauss (1992) の定義に従えば、ブロカット語は危機に瀕した (endangered) 言語の段階を超え、瀕死の状態にある (moribund) 言語であると言えよう。

1.3. 自称・他称

ブータン諸語研究の嚆矢となった van Driem (1991) 以来、該言語はブロカット (英語: the Brokkat language, ゾンカ語: བློ་མཁའ་) と称されてきた。これは母語話者による自称であるとされるが、筆者の調査ではドゥル村の遊牧民 (ブロックパ) はこの言語を Brok.pa.gi.kha 'བློ་མཁའ་གྱི་ཁྱེད་ཀྱི་སྐད་ཀྱི་སྐད་ཀྱི་སྐད་' 乃至は B'umtha-D'ur-g'i Bjo-bi-kha 'བུམ་ཐ་དུ་ར་གྱི་བློ་མཁའ་' とも称していることが確認された。なお、民族名の自称はブロックパ [b.ɔk¹ pa¹] /brok.pa/ または ドゥルドック [du¹ dɔk¹] /dur.drok/ である。

ドゥル村の住民は遊牧民 (Brokpa) と農耕民であるケンパ (Khengpa) から構成されている。遊牧民の自称はドゥルドック (Dur Drok), 農牧民のことをドゥルメン (Dur Moen) と称する。農耕民は自称はメン (Moen), 遊牧民のことをモニ (Moni) と称する。このモニは、チベット南部の非文明化仏教信仰民族集団の総称であるモンパと同源で、これはドゥルドックの故地はロカ地域以南であることを示すものと考えられる。500 年前ならブータン人

=モンパであろうが、100年前ならブータン人はドゥクパでブータン人以外のチベット南部少数民族がモンパであり、固有名詞ではなく一般名詞の他称として彼らがモンパ、モンミと呼ばれていたと考えられる。通婚が一般的になっており、純粋な Dur Druk は既に 20 世帯となっている。ドゥルドゥックは配偶者がドゥルメンだと子供たちはドゥルメンとされる。

1.4. 伝承・生業形態など

伝説によれば、ツァングバラム (Tsangba Lam) という高僧に仕えていたドゥルドゥックの祖先が、ドゥルドゥック (Dur Drok), カンドゥック (Kang Druk), テンドゥック (Ten Druk) という3つの集団に分かれて100年ほど前にブータンに移住した。カンドゥックはサンサンマ村とジャンベル村に、テンドゥックはドクロン村とナンシベル村にそれぞれ定住した。ブータンの諸民族集団には祖先伝承に天孫降臨, 3兄弟 (3氏族), 貴種流離の3パターン (あるいはその組み合わせ) があるが、これはその中で3氏族の伝承に当たるものである。テンドゥックとはチェルラルチュを挟んで隣接した遊牧地をもっているため、一番関係が深い。ドゥルドゥックのみが自身の言語を保持している。

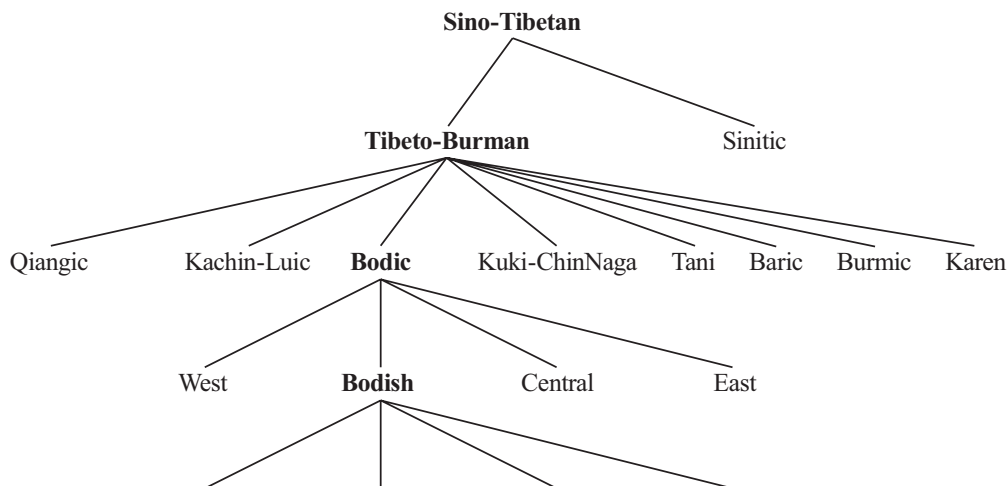
ドゥル村にはドゥル・ドゥン (Dur Dung) と呼ばれる支配者集団が存在したが、現在でもドゥル・ドゥンの末裔がドゥルトゥ (Dur Toed) 地区に居住している。

かつては、ドゥルドゥックは中国側に米, 大麦, 染め物の原料等を作り中国側からは塩, 布製品等を買っていた。現在では、銅製品, 赤米, ポップ, 冬虫夏草を売っている。かつては、中国側との貿易はドゥルドゥックがブータン側でその権利を有し、他の民族集団がドゥルドゥックに先立って中国側と取引した際は、相手を殺しても罪に問われない決まりがあった。

ブータン暦の3月から7か月間高地に移牧していたが、現在では5世帯がこの習慣を守っているのみである。学齢児童は、授業の為高地に移住はしない。ヤクを60頭にお菓子をつけてから野に放ちお菓子を取るためにヤクを追いかける伝統的な行事も危険であるとのことで政府の指導で禁止されている。言語を含めたドゥルドゥックの伝統文化が今後伝承されるかが大きな問題となっている。

1.5. 系統関係

プロカット語は Central Bodish に属すると考えられる。その言語系統は、Sino-Tibetan,



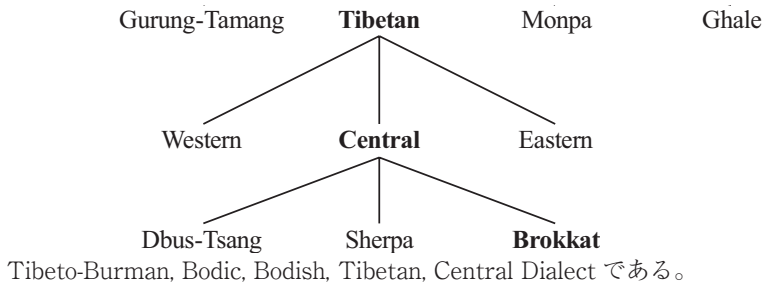


図 2: ブロカット語の系統関係

1.6. 類型の特徴

ブロカット語は膠着語で SO/AOV の構成素順序を有する。しかしながら、述語動詞が文末に立つという厳格な文法的制約に違反しない限り、その他の構成要素の順序はかなり自由である。形態統語論に関しては、概ねチベット語諸方言（中央方言・アムド方言・カム方言）と平行であるが、動詞語幹の中にはチベット語とは明らかに系統を異にするものが存在し、また述語形式（助動詞）や助詞の中にはチベット語の最も古い形式と同定できるものもあり、また, epistemic verbal category には非常に興味深い現象を有する言語であるので、この分野では非常に貴重なデータを提供してくれる言語である。

ブロカット語は典型的な後置詞言語であり主なものとして、処格 < lu > (location, direction, purpose of action and possessor of object), 奪格 < ne > (source and the starting point), 属格・具格 < gi > (the agent or the instrument, the reason, possession) 与格 < na >, 比較格 < lε > などが挙げられる。

1.7. 調査協力者について

調査協力者 (language consultant) としてドゥル村生まれでブロカット語の生え抜きである Neten Tsering 氏 (63 歳) にご協力頂いた⁵⁾。同氏は日常的にこの言語を使用している。同氏の第一言語であるブロカット語の他に、ゾンカ語、ブムタン語の会話能力を、シャルチョップ語、ザラ語、ホツァムカ語の聴解能力をそれぞれ有する。

2. 共時的音韻論

2.1. 音節構造

音節構造は以下の如くである：

(C1) (C2) V (C3) / T

(C1 = 音節初頭子音, V = 音節主核母音, C2 = 音節末子音, T = トーン)

5) この場を借りて同氏及びそのご家族の皆様に感謝の意を表したい。

頭子音連続としては、/p, ph, b / + /r/ という結合がみられる。e.g. pra^H ‘猿’, phra^H ‘水平な’, bre^H ‘髪を梳く’

以下では、これらの成分の位置にどのような音素が立ちうるか、またそれらの音価を検討してゆく。

2.2. 頭子音

子音音素は以下の如くである：

		labial	alveolar	retroflex	alveo-palatal	palatal	velar	glottal
stops	unaspirated	p	t	ʈ		c	k	
	aspirated	p ^h	t ^h	ʈ ^h		c ^h	k ^h	
	voiced	b	d	ɖ		ɟ	g[g]	
affricates	unaspirated		ts		tɕ			
	aspirated		ts ^h		tɕ ^h			
	voiced		dz		dʒ			
fricatives	unaspirated		s		ɕ			h
	voiced		z		ʒ			ɦ
nasals	voiced	m	n			ɲ	ŋ	
laterals	voiced		l					
	voiceless		ɭ					
approximant	voiced		r[ɹ]					
	voiceless		ɻ[ɹ]					
gides	voiced	w				j		

図 3: ブロカット語の子音音素

ミニマルペアは以下の如くである：

p	[pa: ^H]	‘写真’	ts	[tsa: ^H]	‘草’
ph	[p ^h a: ^H]	‘遠くへ’	ts ^h	[ts ^h a: ^H]	‘塩’
b	[ba: ^H]	‘仮面’	dz	[dza: ^L]	‘柄杓’
t	[ta: ^H]	‘虎’	tɕ	[tɕa: ^H]	‘鉄’
th	[t ^h a: ^H]	‘～の周囲に’	tɕ ^h	[tɕ ^h a: ^H]	‘準備する’
d	[da: ^R]	‘矢’	dz	[dza: ^R]	‘虹’
t	[ta: ^H]	‘体毛’			
th	[t ^h a: ^H]	‘血’			
ɖ	[tɖa: ^R]	‘似ている’	s	[sa: ^H]	‘地面’
c	[ca: ^H]	‘運ぶ’	ɕ	[ca: ^H]	‘肉’
ch	[cha: ^H]	‘凍る’	h	[ha: ^H]	‘理解する’
ɟ	[ɟa: ^R]	‘延期する’	ɦ	[ɦo: ^L]	‘～の下に’

k	[ka ^H]	‘注文する’	m	[ma ^H]	‘話す’
kh	[kha ^H]	‘口’	n	[na ^H]	‘暫定的な’
g	[ga ^R]	‘塞がれた’	ɲ	[ɲa ^H]	‘魚’
l	[la ^H]	‘魂’	ŋ	[ŋa ^H]	‘5’
r	[ra ^R]	‘山羊’	ʈ	[ʈa ^H]	‘神’
w	[wa ^R]	‘木製の’	j	[ja ^H]	‘痒み’

2.3 母音

母音音素は以下の如くであり、一部長短の対立及び鼻母音がある。各ペアともに、長母音の方が短母音よりも舌の位置が若干高い。

短母音			長母音			鼻母音		
i	y	u	i:	y:	u:	ĩ	ỹ	ũ
e	ø	o	e:	ø:	o:	ẽ	õ	õ
ε			ε:			ẽ		
	a[a]			a:[a:]			ã [ã]	

図 4: ブロカット語の母音音素

各母音音素の例は以下の如くである：

i	[pi ^H]	‘引っ張る’
y	[py ^H]	‘脱ぐ’
u	[pu ^L]	‘息子’
e	[pe ^H]	‘開く’
ø	[pø ^R]	‘チベット’
o	[po ^R]	‘子供’
ε	[pε: ^R]	‘羊毛’
a	[pa: ^H]	‘写真’

2.4 トーン

ブロカット語には高調 (high tone) と低調 (low tone) の音韻論的対立が認められる。また contour tone として高昇調 (rising tone) が観察される。また高調の異声調 (allotone) として、形態素境界では下降調 (falling tone) が現れる ([55] → [53] or [54] / ___#)。ストレスや発声様式 (phonation type) といった超分節音素はこの言語では弁別的ではない。音声レベルでは促声調にも高昇調が存在する。

頭子音における摩擦音・鼻音・側面音・接近音・半母音と高調・高昇調との共起関係は以下の如くである：

頭子音	高調	低調	高昇調
無声摩擦音	✓		✓
有声摩擦音		✓	✓
側面摩擦音	✓		
無声声門摩擦音	✓		
鼻音	✓		✓
側面音	✓		✓
接近音			✓
半母音	✓		✓

複音節語は第一音節が高調の場合は後の音節は低調に、第一音節が低調の場合は第二音節が高調になり第三音節は低調になる。

3. 通時音韻論

本節は、文語チベット語からブロカット語への音韻上の史的变化を纏めたものである。

3.1 無声無気閉鎖音・破擦音・摩擦音

チベット文語 k-, dk-, bk-, rk-, lk-, sk-, > ブロカット語 k

例：dkar po > kar^H pa^H ‘白’

rkang pa > ka^H ba^H ‘脚’

チベット文語 c-, gc-, bc-, lc-, > ブロカット語 tɕ

例：ca lag > tca^H la^H ‘事’

bcu > tɕu^H ‘10’

チベット文語 t-, gt-, bt-, rt-, lt-, st-, brt-, bst- > ブロカット語 t

例：gtam dpe > tam^H zu^H ‘尾’

rta > ta^H ‘馬’

チベット文語 p-, dp-, sp- > ブロカット語 p

例：pags > pa^H go^H ‘皮膚’

spu > pu^H ‘毛’

チベット文語 ts-, gts-, bts-, rts- > ブロカット語 ts

例：rtse > tse^H to^H ‘頂上’

3.2 無声有気閉鎖音・破擦音

チベット文語 kh-, 'kh-, mkh- > ブロカット語 kh

例：'khor lo > khol^H lo^H ‘車輪’

(mkhal ma > d̄ang^L ma^H ‘腎臓’)

チベット文語 ch-, 'ch-, mch- > ブロカット語 t̄ch

例：chang > t̄chang^H ‘酒’

'cham po > t̄cham^H tok^H to^H ‘愛しい’

チベット文語 kh-, 'th-, mth- > ブロカット語 t̄ch

例：thag pa > thak^H pa^H ‘繩’

mthon po > thom^H bo^H ‘高い’

チベット文語 tsh-, tshw-, mtsh-, 'tsh- > ブロカット語 tsh

例：tsha wa > tsha^H ‘塩’

(tsha ba > tsa^H ‘熱’)

3.3 無声摩擦音

チベット文語 sh-, gsh-, bsh- > ブロカット語 c

例：bshal nad > t̄cap^H c̄or^H ‘下痢’

チベット文語 s-, gs-, bs- > ブロカット語 s

例：sems pa > sem^H ba^H ‘心’

gseb > sep^H ‘牡馬’

チベット文語 h- > ブロカット語 k

例：ha yang > ka^H la^H ‘鍋’

チベット文語 lh- > ブロカット語 t̄

例：lha > t̄a^H ‘神’

チベット文語 sr- > ブロカット語 s

例：sro ma > so^H ma^H ‘昆虫の卵’

3.4 有声閉鎖音・破擦音

チベット文語 g- > ブロカット語 k

例：gangs > kip^H pe^H ‘氷’

チベット文語 j- > ブロカット語 t̄c

例：ja > t̄ca^L ‘茶’

チベット文語 d- > ブロカット語 t

例：dug > tu^L ‘毒’

チベット文語 b- > ブロカット語 p

例：ba glang > pa^L ‘共用家畜’

チベット文語 dg-, bg-, rg-, sg- > プロカット語 k

例：bgo bsha > kop^L ca^H ‘部分’

チベット文語 rj-, lj-, brj- > プロカット語 tc

例：brejed > tce^L ‘忘れる’

チベット文語 rj-, lj-, brj- > プロカット語 tc

(例無)

チベット文語 mg- > プロカット語 g

例：'go pa > gon^L ma^H ‘指導者’

なお、チベット文語の'a-chun で始まる形態素は低声調に(反例：'og > o^H la ~の下方に), 'a-chen で始まるものは高声調となっている。

3.5 下接字 -y-, -r-

-y- and -r-

例：skyur po > chur^H ma^H ‘酸っぱい’

khyi po > ki^H ‘犬’

brgyad > gae^L ‘8’

'gyod pa > jo^L pa^H ‘後悔’

dkrug > tru^H ‘かき混ぜる’

khrag > trha:^H ‘血’

dr- > tr

例：drod > do^L ‘熱’

3.6 末子音 -g 及び^{*} -gs

例：stag > tak^H ‘虎’

lcags > tca:^H ‘鉄’

yag po > ja^H ceng^H ‘良い’

3.7 チベット文語 末子音 -ng 及び^{*} -ngs

例：bsangs > sang^H ‘お香’

-ng > -ng

例：cing > ceng^H ‘木’

3.8 チベット文語 末子音 -d

例：skad > ke^H ‘声’
 drod > dɕ^H ‘熱’

3.9 チベット文語 末子音 -n

例：gcin > tci^H ‘尿’
 bdun > dyn^H ‘7’

3.10 チベット文語 末子音 -b 及び -m

-m, -ms > -m
 例：sa mtshams > sen^H sam^H ‘橋’

3.11 チベット文語 末子音 -r

例：mar > mar^L バター
 dkar po > kar^H po^H ‘白’
 skar ma > kar^H ma^H ‘星’

3.12 チベット文語 末子音 -l

例：bal > be:R ‘羊毛’
 sbal pa > be^L be^H ‘蛙’
 rgyal po > ge^L po^H ‘王’

3.13 チベット文語 末子音 -s

-s > ∅
 例：'bras > bre^R ‘米’

3.14 声調の発達

高低調の対立発生の過程を歴史的來源から看ると、その音韻的条件は以下のように纏められる⁶⁾。

音節頭子音	C ₃ [-vd]	C ₃ = nasal/w/l/r/j	C ₃ [+ vd]
	C ₁ C ₂ -		#
音節末子音	高調		低調

高調：C₁C₂C₃(C₃ = nasal/w/l/r/j) or C₃[-vd]

低調：C₃ (= nasal/w/l/r/j) or C₃[+ vd]

図 5: 声調の史的発展

6) C₁・C₂は文語チベット語の音節構造における子音の配列を示す。文語チベット語の音節構造は((C₁)C₂)C₃(C₄)V(C₅(C₆))であり、音素配列は、C₁= b(/_r, l, s), C₂= g, d, b, r, l, s, m, n, fi, C₃= k, kh, g, t, th, d, p, ph, b, f, fh, dʒ, ts, tsh, dz, m, n, ŋ, f, ʒ, s, z, l, r, w, j, ʔh, C₄= l, r, w, j, V = a, i, u, e, o, C₅= g, d, b, m, n, ŋ, r, l, s, fi, C₆= s(/g, ŋ, b, m)_である。

4. 基礎語彙

本稿で提示するプロカット語の基礎語彙は, Holman et al. (2008) に挙げられている項目から取捨選択したものである。

all	ra ^L ba ^H	fear	dzi ^L gi ^H
and	daŋ ^L	feather	dø ^R
animal	taŋ ^L taŋ ^L	fight	ta ^H
ashes	the ^H la ^H	fire	me ^H
at	la ^L	fish	ŋa ^H
back	za ^L hun ^R	five	ŋa ^H
bad	tsok ^H pa ^H	flower	me ^L to ^H
big	tɕum ^H mo ^H	fly	liŋ ^L
bird	tɕa ^R	foot	kaŋ ^H ba ^H
bite	mu ^H	four	pɕi ^R
black	nak ^L po ^H	freeze	kik ^H pe ^H
blood	t ^h a ^H	fruit	ɕiŋ ^H de ^H
bone	ro ^H	full	tem ^H tem ^H
breath	bu ^R	give	be ^L
burn	sa ^H	good	ja ^H ɕeŋ ^H
child	po ^L dza ^H	grass	tsa ^H
cloud	mu ^H ba ^H	green	ŋon ^H bo ^H
cold	c ^h a ^H bo ^H	hair	ɾa ^H
come	bre ^R	hand	lak ^L pa ^H
count	taŋ ^L	he	ro ^H
cut	tsap ^H	head	go ^L
day	ŋi ^L ma ^H	hear	dø ^R
die	ɕi ^H	heart	sem ^H
dig	hok ^H	heavy	dzy ^R
dirty	kam ^L ro ^L si ^H si ^L	here	di ^L tɕuŋ ^L la ^H
dog	ki ^H	hold	len ^L
drink	t ^h uŋ ^H	how	kaŋ ^L dø ^{RH}
dust	the ^H la ^H	husband	c ^h o ^H ga ^H
ear	na ^H	l	ŋa ^H
earth	sa ^R	ice	kaŋ ^L
eat	sa ^L	if	= na
egg	go ^L ŋa ^H	in	= naŋ
eye	mik ^H	kill	sɛ ^H
fall	ken ^L ɟap ^H	know	ɕe ^H
fat	am ^H a ^H	lake	ts ^h o ^H
father	a ^H pa ^H	laugh	gar ^L ɕa ^H

leaf	lap ^L	sky	nam ^H
left side	jøn ^H pa ^H	sleep	ne ^H
leg	ka ^L ba ^L	small	təuŋ ^H
lie	ɔp ^H	smell	dim ^L nam ^H
long	riŋ ^L k ^h en ^H	smoke	dau ^L
louse	ɕik ^H	snake	po ^H
man/male	mi ^H	snow	k ^h a ^H
many	tʂa ^H ma ^H	star	kam ^H ma ^H
meat/flesh	ɕa ^H	stick	dza ^L
moon	dɛ ^L kar ^H	stone	tsik ^H pa ^H
mother	a ^H ma ^H	straight	təaŋ ^H taŋ ^H taŋ ^H
mountain	ri ^L ga ^H	sun	ŋi ^L ma ^H
mouth	k ^h a ^H	tail of birds	dzu ^L mo ^H
name	miŋ ^R	they	ro ^L so ^L
near	to ^H ma ^H la ^H	thick	t ^h u ^H hen ^H
new	saŋ ^H ba ^H	thin	ɕap ^L tɕa ^H
night	nu ^L ma ^H	think	ce ^H
nose	na ^H ko ^H	this	di ^L
old	ni ^H pa ^H	thou	tɕø ^H
one	tɕik ^H	three	suŋ ^H
other	zəm ^L ba ^H	throw	cu ^H
person	mi ^H	tie	taŋ ^H
play	tse ^H	tongue	tɕe ^L
pull	t ^h en ^H	tooth	sa ^H
push	phø ^H	tree	dø ^L ba ^H
rain	tɕa ^H ra ^H	two	ŋi: ^H
red	ma ^H pa ^H	walk	pre ^R
right side	e ^H pa ^H	wash	t ^h u ^H
river	tɕu ^H tsaŋ ^H	water	tɕu ^H
road	lam ^L	we	ŋi ^L
root	ra ^L do ^H	what	tɕi ^H
rope	t ^h ak ^H pa ^H	when	nam ^R
round	kor ^H kor ^H	where	ka ^R na ^H
salt	ts ^h a ^H	white	ka ^H po ^H
sand	pze ^L ma ^H	who	su ^H
see	ta ^H	widely	li ^R ŋɛ ^H
sew	dɛp ^L	wind	lũ ^H ba ^H
sharp	noi ^H	with	daŋ ^L
short	t ^h uŋ ^H ŋi ^H	woman	pi ^R me ^H
sing	ɕop ^L toŋ ^H	wood	ɕi ^H
sit	dø ^R	year	lo ^R
skin	pa ^H go ^H	you	ro ^H

5. 小結

本稿ではプロカット語の音声・音韻について報告した。プロカット語の音韻に関しては、語彙の精密な記述及び自然談話に観られる音調を文語チベット文語形式との対応関係を詳細に検討することが有効な分析方法となりうる。

本言語の音韻論的特徴は以下のように纏められる：

1. 子音音素として無声接近音が存在すること。
2. 母音音素すべてに長短の区別があること、また鼻母音が存在すること。
3. 一般的に文語チベット語の無声有気閉鎖音・無声摩擦音・無声ソノラントの子音は高調、有声子音は低調と共起するが、ソノラントの子音に関しては例外も存在すること。
4. 促声調にも高昇調が存在すること音韻論的には弁別的ではないこと。
5. 継続音[+ cont]は低調とは共起しないこと。

今後より多くの語例について調査し同様の分析を施すことにより、更に詳細な史的变化を辿ることが可能となると考えられる。またプロカット語にみられるチベット語と酷似する形式の来源（偶然の一致であるか、同源であるか、借用語であるか、言語接触の結果であるか）を判定することが次の重要な手続きとなる。この点に関しては稿を改めて論じたい。

参考文献

- Aris, Michael. 1986. *Sources for the history of Bhutan*. New Delhi: Motilal Banarsidass.
- van Driem, George. 1991. *Report on the first linguistic survey of Bhutan*. Thimphu: Royal Government of Bhutan.
- van Driem, George. 1998. *Dzongkha*. Leiden: Research School of Asian, African and Amerindian Studies.
- van Driem, George. 2001. *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region, containing an Introduction to the Symbiotic Theory of Language* (2 vols.). Leiden: Brill.
- van Driem, George. 2007. Endangered Languages of South Asia. In Matthias Brenzinger, ed. *Handbook of Endangered Languages*. Berlin: Mouton de Gruyter. pp. 303-341.
- Holman, Wichmann, Brown, Velupillai, Müller, Bakker (2008). Explorations in automated language classification. *Folia Linguistica*. 42.2: 331-354.
- Jiang, Di (江荻). 2002. 《藏语语音史研究》[*Research on Historical Phonetics of Tibetan*] 北京：民族出版社 [Beijing: Minzu Chubanshe]. 【in Chinese】
- Krauss, Michael E. 1992. The world's languages in crisis. *Language*. 68 (1): 4-10.
- Nishi, Yoshio (西義郎). 1987. 「現代チベット語方言の分類」[The classification of modern Tibetan dialects]. 『国立民族学博物館研究報告』*Bulletin of the National Museum of Ethnology*. 11.4: 837-900. 【in Japanese】
- Nishi, Yoshio (西義郎). 1990. 「ヒマラヤ諸語の分布と分類 (上)」[The Distribution and Classification of Himalayan Languages (Part I)]. 『国立民族学博物館研究報告』*Bulletin of the National Museum of Ethnology*. 15.1: 265-337. 【in Japanese】
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2008. 「ブータン王国の言語政策－現状と課題－」[Language Policy in the kingdom of Bhutan] 日本言語政策学会第10回大会 [the 10th Annual Meeting of Japan Association of Language Policy]. 奈良教育大学 [Nara University of Education]. 9 November, 2008. 【in Japanese】
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2012. 「ブータン王国の East Bodish 諸語の系統と分類について」[Genetic

- classification of East Bodish Languages in the kingdom of Bhutan] 第25回日本南アジア学会全国大会 [The 25th Annual Conference of the Japanese Association for South Asian Studies]. 東京外国語大学 [Tokyo University of Foreign Studies]. 6-7, October, 2012. 【in Japanese】
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2013a. 「ブータン諸語の記述・歴史言語学的研究の現状」 [Status quo of descriptive and historical linguistic studies on Bhutanese languages]. 『秋田大学教養基礎教育研究年報』 [Annual research Report on General Education, Akita University] 15: 75-82. 【in Japanese】
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2013b. 『旅の指さし会話帳ブータンゾンカ語』 [A picture phrasebook of Dzongkha] 情報センター出版局 [Tokyo: Jōhō sentā shuppankyoku]. 【in Japanese】
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2013c. 「ブムタン県ドルル村の遊牧民－言語特徴とその背景－」 [A first report on Dur (Dhur) Brokkat -a language of a neglected tribe in Bhutan-]. 第2回ブータン勉強会 [The 2nd meeting of Bhutan study group]. 早稲田大学 [Waseda University]. 11 May, 2013. 【in Japanese】
- Nishida, Fuminobu. 2013d. The Brokkat language in Bumthang, Bhutan. Paper presented at the 19th Himalayan Languages Symposium. The Australian National University. 7-8 September, 2013.
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2014. 「マンデビ語・ブムタン語及びプロカット語における音韻体系の年代差」 [Sound changes as reflected in the age differentiation in Mangdebikha, Bumthangkha and Brokkat.] 第4回ブータン研究会 [The 4th annual meeting of Bhutanese Studies]. 早稲田大学 [Waseda University]. 11 May, 2014. 【in Japanese】
- Nishida, Tatsuo (西田龍雄). 1983. 「チベット語の歴史と方言研究の問題」 [Issues in Tibetan historical linguistics and dialectal study]. 『チベット文化の総合的研究』 [A Holistic Approach to Tibetan culture]. 京都大学文学部 [Kyoto: Faculty of Letters, Kyoto University]. pp.3-20. 【in Japanese】
- sKal-bzang 'Gyur-med and sKal-bzang dByangs-can (格桑居冕・格桑央京). 2002. 《藏语方言概论》 [An Introduction to Tibetan Dialects] 北京: 民族出版社 [Beijing: Minzu Chubanshe]. 【in Chinese】
- Tournadre, Nicholas. 2005. L'aire linguistique tibétaine et ses divers dialectes. *Lalies*, 2005,5: 7-56.
- Tournadre, Nicholas et Dorje Sangda. 2003. *Manuel de tibétain standard : Langue et civilization*. Paris: L'Asiathèque Langues du monde.



写真 1: ネンテンさんご一家と (於野営地)

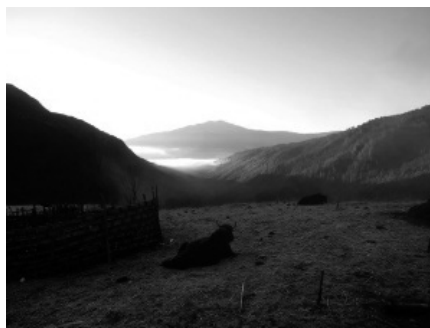


写真 2: 野営地の夜明け

写真 3: クレ (そば粉のクレープ) の
ヤクバター添え

写真 4: ヤクシャ (ヤク肉) 干し

【本研究に係る現地調査については、平成 23-25 年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究 B 研究課題番号：23720195）「ブータン王国の危機言語マンデビ語の現地調査による記述及び形態統語論的研究」（研究代表者 西田文信）の助成を受けている。

本稿を脱稿後、神戸市外国語大学の武内紹人教授による御論考を得た：武内紹人. 2014. 「Bumthangkha と Brokkat—中央ブータン（ブムタン地域）における言語調査報告—」『神戸外大論叢』64(3)pp.53-68. 同教授には筆者の研究に対して深いご理解とご協力を賜り、深甚なる敬意と感謝を申しあげる次第である。】